

# ダニエル書 - 第百五十五号

ダニエルの最後の幻視の解き明かし：賢いおとめたちの並行する歩み

Jeff Pippenger

2024-03-24

私たちは、ダニエルの最後の幻についての考察を、ダニエルを神の終末時代の契約の民の象徴として見定めることによって始め、また第一節を最後の章と関連づけて用いることにより、ベルテシャザルによって表されるその終末時代の民の預言的特質を明らかにし始めてきた。神の終末時代の契約の民は、第一天使の運動におけるミラー派、および第三天使の運動における十四万四千人を表している。ミラー派は十人のおとめのたとえを成就したのであり、そのたとえは終わりの日において寸分変わらず繰り返される。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

終末の時代における二つの運動の経験は、アドベンティズムの経験である。

「マタイ25章の十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験も示している。」 『大いなる論争』 393.

ミラー派は第一の天使の運動を象徴しており、彼らの経験はフィラデルフィアの教会によっても象徴されていた。1856年、フィラデルフィア期のミラー派運動はラオデキア的運動へと移行し、1863年の反乱では、さらにラオデキア的なセブンスデー・アドベンチスト教会へと移行した。

十四万四千人は第三の天使の運動を表しており、彼らの経験はフィラデルフィアの教会によっても表されていた。1989年には、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチスト教会に対してダニエル書の封印が解かれ、2001年9月11日にラオデキア的アドベンチスト運動が始まり、2023年7月にはフィラデルフィア的運動への回帰が到来した。

ベルテシャツアル、すなわちダニエルは、終わりの時のフィラデルフィアの運動を表しており、その運動はミラー派のフィラデルフィアの運動を一字一句まで繰り返す。最後の幻の第一節はその終わりの時の民を表しており、最後の幻の最後の証しは、最後の幻の最初の証しと一致していなければならない。ダニエル書12章の清めの過程は、知識の増加と、その結果生じる二つの階級を明らかにしている。ベルテシャツアルは、終わりの時の悟る者たちの究極の象徴である。ダニエル書12章には、ミラー派の運動の錨となった少なくとも五つの預言的真理があり、これらは第三天使の運動において繰り返されなければならない。

第一は、礼拝者を二種類に分ける清めの過程であり、したがって、初期の運動と終わりの運動の双方において十人のおとめのたとえを成就する。

しかしあなたは、ダニエルよ、この言葉を秘め、書を封じて、終わりの時まで守れ。多くの者が行き巡り、知識は増し加わる。そして彼は言った。「行きなさい、ダニエルよ。この言葉は終わりの時まで閉ざされ、封じられている。多くの者が清められ、白くされ、試される。しかし悪者どもは悪を行い、悪者のうちには悟る者がいない。だが賢い者は悟る。」ダニエル書12:4、9、10

賢い者と悪しき者（愚か者）を区別する基準は、終わりの時に開かれる知識の増大を、彼らがどのように理解（心で区別）するかに基づいている。その「終わりの時」は、ミラ一派にとっては1798年、十四万四千人にとっては1989年である。神の民は、アドベンチズムが十人の乙女のたとえの経験であることを知っていなければならない。そうした理解がなければ、最後の世代にとっての「終わりの時」がいつ到来したのか、またそのときにどのようなメッセージが封印を解かれたのかを理解しようとはしないだろう。アドベンチストの経験が、真理の漸進的な展開に基づく三段階の試験の過程であり、それが「生きるか死ぬか」の結果へと至るのだという理解がなければ、すべてのセブンスデー・アドベンチストの高い召しを認識することは不可能である。ベルテシャザルは、「清められ、白くされ、試される」と表現される浄化の過程を自分たちが通ったことを知っている民を表している。まさにその三段階の浄化の過程は、聖霊の働きとして明確に示されている。

しかし、あなたがたに真実を言います。わたしが去っていくことは、あなたがたにとって益なのです。わたしが去らなければ、助け主はあなたがたのところに来ません。しかし、わたしが去れば、わたしは彼をあなたがたのところに遣わします。彼が来ると、彼はこの世に、罪について、義について、さばきについて、その誤りを明らかにします。罪については、彼らがわたしを信じないからです。義については、わたしが父のもとへ行き、あなたがたはもはやわたしを見ないからです。さばきについては、この世の支配者がさばかれているからです。あなたがたに言うべきことはまだ多くありますが、今はそれに耐えることができません。しかし、その方、真理の御霊が来るとき、彼はあなたがたをすべての真理へと導きます。彼は自分から語るのではなく、聞いたことを語り、やがて起こることをあなたがたに知らせます。ヨハネによる福音書 16:7-13.

聖霊が賢い乙女たちを「すべての真理」へと導く働きには、彼が罪と義と裁きについて世界を責めること（すなわち、戒め、罪を認めさせること）が求められるが、これはダニエル書12章において賢い乙女か愚かな乙女を生み出す三つの段階とまったく同じである。イエスが聖霊の働きとして示されたそのメッセージこそが「油」であり、それがダニエル書12章における賢い者と悪しき者の違いを明らかにする。終わりの時代の神の民は、自分たちの世代のための知識の増大を理解しなければならず、その知識には、自分たちがマタイ25章のたとえにおいて愚かな乙女なのか賢い乙女なのかを認識することが含まれている。

ヨハネは聖なる幻の中でこれらのことを示された。彼は、五人の賢い乙女に象徴される集団を見た。乙女たちはともしびを整えて燃やしており、彼は歓喜して叫んだ。「ここに聖徒たちの忍耐がある。ここに、神の戒めとイエスへの信仰を守る者たちがいる。」また私は、天から私にこう告げる声を聞いた。「書き記せ。今から後、主にあって死ぬ者は幸いである。然り、と御霊は言う。彼らはその労苦から休むからである。彼らの

行いは彼らについて行く。」

多くの人々は、第一と第二の天使のメッセージを聞いて、自分たちは天の雲に乗って来られるキリストを見るまで生きるだろうと考えた。もし真理を信じると公言したすべての人が、賢い乙女たちとしての役割を果たしていたなら、そのメッセージはすでに、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えられていたはずである。だが、五人は賢く、五人は愚かであった。本来なら、その真理は十人の乙女たちによって宣べ伝えられるべきであったが、彼らに与えられた光のうちを歩むその群れに加わるのに不可欠な備えをしていたのは、五人だけであった。第三天使のメッセージが必要であった。この宣言はなされるべきであった。第一と第二の天使のメッセージに促されて花婿を迎えに出て行った多くの人々が、世に与えられる最後の試練のメッセージである第三天使のメッセージを拒んだ。

黙示録18章に描かれているもう一人の天使がそのメッセージを告げるとき、同様の働きが成し遂げられるであろう。第一、第二、第三の天使のメッセージは、繰り返して宣べ伝えられる必要がある。教会にはこうした呼びかけがなされる——『わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずかることのないように。』『大いなるバビロンは倒れた、倒れた。そして悪霊どもの住まいとなり、あらゆる汚れた霊の巣窟となり、すべての汚れた憎むべき鳥の檻となった。諸国の民はみな、彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地の商人たちは彼女のぜいたくの豊かさによって富を得た。……わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、その災厄を受けないために。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである。』 [黙示録18章2-5節]

この章の一つひとつの節を取り上げ、注意深く読みなさい。とりわけ最後の二節を。「ともしびの光は、あなたのうちで、もはや二度と輝くことはない。花婿と花嫁の声も、あなたのうちで、もはや二度と聞かれることはない。というのは、あなたの商人たちは地の大いなる者たちであり、あなたの魔術によってすべての国々が惑わされたからである。そして彼女のうちには、預言者たちの血、聖徒たちの血、そして地上で殺されたすべての者の血が見いだされた。」

「十人の乙女のたとえはキリストご自身によって与えられたものであり、その一つ一つの点を注意深く研究すべきである。やがて戸が閉められる時が来る。私たちは賢い乙女か愚かな乙女のどちらかとして表されている。今は、誰が賢く誰が愚かであるかを見分けることも、それを言う権威も、私たちには与えられていない。不義のうちに真理を持っている者たちがいて、彼らは外見上は賢い者のように見える。」 Manuscript Releases, 第16巻、270ページ。

間もなく来る日曜法の際に、バビロンから男女を呼び出すべきアドベンチストとして、私たちは「賢いおとめ」か「愚かなおとめ」のいずれかによって表されている。ヨハネが見た、灯火を整えて灯していた五人の賢いおとめに象徴される一団は、ヨハネがさらに「聖徒の忍耐」を持ち、「神の戒めとイエスへの信仰を守る者たち」として示した人々であり、彼らこそ十四万四千人である。彼らは神の戒めを守り、イエスへの信仰を働かせ、また自分たちがマタイ二十五章のたとえに出てくるおとめであることを知っていなければならない。彼らは自分たちが賢いおとめか愚かなおとめかのいずれかであることを理解するだけでなく、ダニエル書で「清められ、白くされ、試みられる」と表された経験

を繰り返さなければならない。

彼らは御座の前で、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌のようなものを歌った。その歌を学ぶことができたのは、地から贖い出された十四万四千人のほかには誰もいなかった。彼らは女によって身を汚していない。彼らは童貞である。彼らは小羊がどこへ行くにも従う者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられる初穂となった。彼らの口には偽りが見いだされなかった。彼らは神の御座の前で傷のない者だからである。ヨハネの黙示録 14:3-5。

ダニエル書十二章には少なくとも五つの真理が表されており、それらは第一の天使に係するミラライト運動に結びついた真理で、十四万四千の運動によって繰り返され、さらに完全に理解されるようになる。一つは、十人の乙女のたとえに結びついた三段階の清めの過程である。ウィリアム・ミラーが預言的な時の観点から最初に理解した真理は、レビ記二十六章の「七つの時」であり、その真理はダニエル書十二章において示されており、そこに挙げられているミラライト史の最初の真理である。

しかしあなたは、ダニエルよ、この言葉を秘し、書を封じよ。終わりの時まで。多くの者があちらこちらを歩き巡り、知識が増し加わる。そこで私ダニエルが見ていると、見よ、ほかに二人が立っていた。一人は川の岸のこちら側に、もう一人は川の岸のあちら側に。すると一人が、川の水の上にいる亜麻布を着た人に言った。「これらの不思議の終わりまでは、どれほどの時ですか。」私は、川の水の上にいる亜麻布を着た人が、右の手と左の手を天に上げ、永遠に生きておられる方にかけて誓って、「それは一つの時と二つの時と半時である。また、聖なる民の力を打ち砕き終えるとき、これらのことはすべて終わる」と言うのを聞いた。私は聞いたが、理解できなかった。それで言った。「我が主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか。」彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行け。この言葉は終わりの時まで閉ざされ、封じられている。多くの者が清められ、白くされ、試される。しかし悪者は悪を行い、悪者のうちには理解する者がいない。だが、知恵ある者は理解する。」ダニエル書 12:4-10

この箇所は、終わりの時までダニエル書が封印されることから始まり、終わりの時までダニエル書が封印されることで結ばれている。ダニエルの言葉の最初と最後の封印の間には、「永遠に生きておられる方」の誓いの証言があり、「それは一時と二時と半時であり、聖なる民の力を打ち砕き散らし終えるとき、これらのすべてのことは終わる」とされた。

この誓いのもとで証言した方は、亜麻布をまとい、水の上におられた方であった。ダニエルはヒデケル川の一方の岸に一人の天使を、もう一方の岸にもう一人の天使を見た。そしてその天使たちのひとりが問いかけ、それに水の上におられた方が答えた。その問いは「いつまでですか。」というものであった。これはダニエル書8章13節で問われている質問の最初の二語と同じである。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

両方の会話には同じ預言的構造が見られる。ただし第八章では、ダニエルはヒデケル川ではなくウライ川のほとりにいる。第八章では、天使（聖者）が、語っていた「かの聖者」に向かって「いつまでか」と言った。「that certain saint」と訳されているヘブライ語は「パルモニ」という語で、「不思議な数え手」または「秘密を数える者」を意味する。第八章ではイエス（不思議な数え手）が語っており、別の聖者がイエス（その「かの聖者」）に「いつまでか」と尋ねた。

第十二章では、水の上に立っておられる方に対し、ヒデケル川の岸の一方にいた天使が「どれほどの期間か」と尋ねている。これら二つの箇所は、行に行を重ねるように、併せて考慮しなければならない。第八章の最初の問いは、「まず異教によって、次いで教皇主義によって行われる、聖所と軍勢の踏みにじりに関するその幻は、どれほどの期間か」である。第十二章の問いは、「これらの不思議の終わりまで、どれほどの時があるのか」である。すると、亜麻布をまとい水の上に立っていた、不思議な数取る者パルモニによって、誓いをもって答えが与えられる——「それは一時と二時と半時であり、彼が聖なる民の力を打ち散らし終えるとき、これらのすべてのことは終わる。」

ウライ川とヒデケル川における問いは、「異教主義、さらにその後の教皇主義が聖所と軍勢を踏みにじりながらもたらず、神の民が散らされるという幻は、いつまで続くのか」というものである。答えは、踏みにじりは1798年に終わり、そのときパルモニによるミラー派の神殿を建て上げる働きが始まり、さらに46年後の1844年、聖所が清められるはずの時にその働きは終わる、というものである。

第十二章でダニエルはその会話を聞いたが、「しかし私は理解しなかった」。ダニエルはキリストに問いかけることによって、理解したいという願いを表明した。「ああ、わが主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか」。彼の理解への願いの表明は、賢いおとめたちの理解への願いを表していた。というのも、その全体の対話は、ダニエル書が終わりの時まで封印されるという二度の言及の間に置かれていたからである。ダニエルは、1798年に封印が解かれた真理を理解するようにウィリアム・ミラーに与えられた願いを表しており、彼が最初に認めるよう導かれた真理は、聖所と軍勢が踏みにじられたことであり、それはレビ記26章の「七たび」の成就の期間、聖なる民の力が散らされていたときに、まずは異教主義によって、次いで教皇制によって行われたということであった。

ミラーの真理を知りたいという願いはダニエルの願いによって表されているが、ミラーの理解は不完全であった。ダニエルはミラーの願いを表し、ベルテシャツアルはその事柄と幻を完全に理解している者たちを表している。ダニエル書第十二章におけるミラー派の経験の一部を成す重要な真理が少なくとも五つあり、それらは十四万四千の歴史において並行するものとして見いだされるだろう。一つは、彼らが十人の処女のたとえを、その三段階の試練の過程とともに成就し、また自分たちがそれを成就していることを理解したということであり、もう一つは、レビ記第二十六章の「七つの時」という礎を理解しているということである。

次回の記事でこの研究を続けます。

「そのとき、天の御国は、ともしびを持って花婿を迎えに出た十人の乙女にたとえられる。彼女たちのうち五人は賢く、五人は愚かであった。愚かな者たちはともしびは持ったが、油を持って行かなかった。しかし賢い者たちは、自分の器に油を、ともしびといっしょに持って行った。花婿が遅れている間に、彼女たちは皆、まどろみ、眠ってしまった。真夜中に叫び声がした。『見よ、花婿が来る。迎えに出なさい。』するとその乙女たちは皆起き上がり、ともしびを整えた。愚かな者たちは賢い者たちに言った。『あなたがたの油を分けてください。私たちのともしびが消えかかっていますから。』しかし賢い者たちは答えた。『いいえ、そうすると私たちにもあなたがたにも足りなくなるでしょう。むしろ売る人たちのところへ行って、自分たちの分を買いなさい。』彼女たちが買いに行っている間に、花婿が来た。用意のできていた者たちは、彼といっしょに婚宴に入った。そして戸は閉められた。その後で、ほかの乙女たちも来て言った。『主よ、主よ、私たちに開けてください。』しかし彼は答えて言った。『まことにあなたがたに言う。私はあなたがたを知らない。』だから、目を覚ましていなさい。人の子が来るその日もその時も、あなたがたは知らないのだから。」

私たちは今、きわめて危険な時代に生きており、キリストの来臨に備えを求めることに、私たちのうち誰一人として遅れてはならない。愚かな乙女たちの例にならい、危機が来るまで待って、その時に耐えうる品性の備えを得れば安全だと考えてはならない。客が招き入れられ、調べられるときにキリストの義を求めようとしても、もはや遅すぎる。今こそキリストの義、すなわち小羊の婚宴に入るのにふさわしい婚礼の衣を身に着ける時である。たとえにおいて、愚かな乙女たちは油を乞い求めるが、請い願ってもそれを受けられない者として描かれている。これは、危機の時に堪えうる品性を育てることによって自らを備えてこなかった者たちを象徴している。まるで隣人のところへ行って、「あなたの品性を私にください。さもなければ私は滅びてしまいます」と言うようなものである。賢い乙女たちは、愚かな乙女たちの今にも消えそうなどもし火に、自分たちの油を分け与えることはできなかった。品性は譲渡できない。買うことも売ることもできない。それは獲得するものである。主は、猶予の時を通して、すべての者に正しい品性を得る機会を与えておられる。しかし、厳しい経験を通り、大いなる教師から教訓を学び、試練の中で忍耐を示し、不可能の山をも取り除く信仰を働かせることによって培ってきたその品性を、一人の人間が別の人に授ける道は備えておられない。愛の香りを分け与え、他者に柔和さ、機転、忍耐を与えることは不可能である。一つの人の心が、神と人への愛を別の心に注ぎ込むことは不可能である。

しかし、その日が来つつあり、すでに目の前に迫っている。その日には、品性のあらゆる側面が特別な誘惑によって明らかにされるだろう。原則に忠実であり、終わりまで信仰を働かせる者たちは、これまでの猶予の時に試みと試練の中で真実であることを証明し、キリストの似姿にしたがって品性を形づくってきた人々である。それは、キリストと親密な交わりを培い、その知恵と恵みによって神の性質にあずかる者たちである。しかし、人間はだれも、心からの献身や高貴な精神の資質を他人に与えたり、その不足を道徳的な力で補ってやったりすることはできない。私たちは、キリストのような模範を人々に示すことによって互いのために多くを成し、それによって、彼らがそれなしには審判に立つことのできない義を求めてキリストのもとへ行くように影響を与えることができる。人は、祈りつつ品性形成という重要な事柄を深く思いめぐらし、神の模範にしたがって自らの品性を形づくらなければならない。The Youth

Instructor, 1896年1月16日.